社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2006年8月号 専大スポーツ

[11面]

今年の注目新人たち

早くも実力を発揮し、数々の大会で活躍している新人たちの中から、更なる可能性を秘めた注目選手8人を紹介します。

ゴルフ部

木村 麻希
＜経済1・明徳義塾高＞

四国女子アマチュア選手権で優勝。関東女子大学春季対抗戦でも活躍し、3位入賞に貢献。

明るく、はつらつとした声が練習場に響く。キラキラとした笑顔で話してくれたのは、ゴルフ部ルーキーの木村だ。

「父親の勧めで、気付いたらゴルフを始めていました」と照れながら話す。ゴルフの面白さを聞くと「スコアがまとまると楽しいです。スコアが良くないと、もっと上手にならなくちゃいけないと思います」と、向上心をもって練習に臨んでいる。

目標とする選手を聞くと「不動裕理選手です」と迷いなく答える。「不動選手は1日に10時間ぐらい練習しているんです。私も不動選手の練習熱心なところを見習いたい」と話す。現状に満足することなく、常に上を目指す姿がとても印象的だった。

毎日練習を欠かさない、練習熱心な木村。彼女なら今年の夏、何か結果を残してくれるに違いない。そして、プロとして活躍する日もそう遠くないはずだ。

（荻野 敦子・文2）

アーチェリー部

佐伯 朋哉
＜経営1・大宮開成高＞

関東学生リーグ戦に出場し、個人成績で1位に。全日本学生王座決定戦にも出場。

第一印象は明るく爽やか。その穏やかな人柄からは、プレー中の気迫溢れる姿はとても想像がつかない。

入学してすぐに関東学生リーグ戦に参戦し、見事個人成績1位に輝いた。在学中の目標はインカレ優勝。夏合宿では体力づくりや心構えを課題に、合宿明けに控える個人戦での優勝を狙っている。

高校時代は、アテネ五輪銀メダリストの山本博さんから指導を受け、アーチェリー部で主将を務めた。部員をまとめあげた責任感の強さと、試合中に見せる強靭（きょうじん）な精神力は天下一品だ。「的に当たらなくては面白くない」。その口ぶりからは、アーチェリーという競技を心底楽しむ姿勢がうかがえる。

「アーチェリーは自分自身にとってなくてはならないものです。いつかオリンピックに山本先生と一緒に出場したい」と目を輝かせる。2008年、専大から五輪選手が誕生するかもしれない。

（渡部 萌・経済3）

卓球部

森田 翔樹
＜商1・青森山田高＞

関東学生新人選手権の男子シングルス、同ダブルスでともに準優勝。

小学校1年生から卓球を始め、高校時代は全国高校総体でダブルス優勝、団体優勝を果たすなど活躍し、専大に入学。名選手を輩出してきた卓球部の歴史と伝統を引き継ぐ新たな担い手の一人として、これからの成長が楽しみな選手である。

「自分から思い切り攻めたい」とプレースタイルは攻撃的だが、インタビューでは言葉の端々から初々しく穏やかな印

水泳部（水球）

堂下 直樹
＜経営1・鹿児島南高＞

ジュニアスロバキア・スロベニア国際大会に日本代表として出場。ポジションはフローター。

「きっかけは兄弟に連れられて、ですね」何気なく始めた水泳から水球へと高校入学時に転向した。1年からメンバー入りを果たし、全国制覇にも貢献してきた。厳しい高校時代の練習を耐え抜いた彼のプレーからは力強さと信頼感を覚えた。

初選出された日本代表での戦いを「肉体的な力の差と、シュート技術の差を痛感しました」と振り返る。同時に世界

象を受けた。

今後の意気込みを聞くと、「秋のリーグ戦では全勝が目標。夏の間に体力面を強化して、とにかく優勝に貢献できるよう頑張ります」と強い決意を表すなど、頼もしい一面も持っている。

厳しい克己心を持つ彼の入部は、卓球部にとって飛躍の契機となるだろう。

（加藤 未希・文2）

の舞台での経験を胸に「日本代表で受けた刺激を大切に、もっとフィジカル面を強化していきたい」と、今後の抱負を語ってくれた。

「指導者やチームメートに恵まれた環境でプレーできることに感謝しています」。日々感謝を忘れず精進していく若き鳳から今後も目が離せない。

（田口 能成・経済2）

バスケットボール部

保坂 和音
＜文1・秋田経済法科大附属高＞

第40回関東女子学生選手権記念大会でベスト8賞を受賞。ポジションはセンター。

「必ず1部に上がり、インカレでトップになりたい。そのためにも今は練習を頑張るしかない」と、リーグ戦開幕に向けて決意を新たにする。「応援に来てくれたらうれしいですし、学校で声をかけてもらうだけでも励みになります」と話す。

昨夏、秋田合宿に来た専大を見て入学を決めた。「練習の雰囲気と、ディフェンスからオフェンスの流れを呼ぶというチームカラーが自分に合うと感じました。入部してからは、以前よりもディフェンスに面白味を感じています」。

苦手な練習は？ と聞くと「走るメニューです。体力がないので。でも勝つためなので、前向きにとらえないと」と、苦笑しつつも決して弱音は吐かない。これからも彼女らしく、楽しく頑張ってほしい。

（松本 かおり・文1）

バドミントン部

井上 春奈
＜商1・埼玉栄高＞

関東大学春季リーグ戦で新人賞を受賞。関東学生選手権女子シングルスで準優勝。

100本ノックのようなハードな練習でも、笑顔を絶やすことなく打ち返し続ける。高校時代に出場したアジアジュニア選手権のような大きな大会でも、緊張するということはなく、強い相手と戦えることに楽しみを感じる。そのバドミントンを楽しむ姿勢が、ここまでの結果を残してきた最大の理由だろう。

プレー中に常に心がけているのは「つらい顔をしないこと」。理由は「つらい顔をした方がつらくなる」から。加えて、笑顔で練習に打ち込めることは、チームワークの良さの証しでもある。

課題はスピードとパワーをつけて自分の試合をすること。目標は2012年のロンドン五輪。世界を目指す若きホープに大きな期待がかかる。

（松原 弘和・法1）

レスリング部

荒木田 進健
＜経済1・光星学院高＞

JOC杯ジュニアオリンピック、アジアジュニア選手権で優勝。フリースタイル120kg級。

1935年の創部以来、8人のオリンピック選手を輩出している専大レスリング部に今年入部した期待のホープが、2年連続高校3冠を達成した荒木田だ。「監督をはじめ、素晴らしい指導者の下、充実した練習をしています」と現況を話す。普段の優しい笑顔から一転、真剣なまなざしで練習に励んでいる。

親の勧めでレスリングクラブへ通い始めたのがきっかけだった。レスリングをしていてうれしいことは「優勝すること」と言う。国内大会での輝かしい成績だけでなく、国際舞台

フェンシング部

阪野 弘和
＜経済1・武生商業高＞

アジア・ジュニア・カデ選手権に日本代表として出場し、男子フルーレで団体・個人ともに優勝。

今や国際大会で優勝するまでの腕前になったフェンシングと初めて出合ったのは、小学校3年の時だった。初めはこわごわ握っていた剣が手になじみ、面白さを覚えるのにそう時間はかからなかった。

フェンシングの魅力は「駆け引き」にあると言う。戦略を練り、相手の裏をかく。そこに面白さがある、と。自分のプレーについては、守りの堅さを長所に挙げる一方で、攻撃面に課題ありと分析する。課題の克服が今後の更なる飛躍の鍵となる。

でも優勝経験を持つ。8月下旬には世界ジュニア選手権を控えており、「出るからには優勝したい」と、意気込みを語ってくれた。

目標は「オリンピックで金メダルを取ること」と、常に世界を見据える。近い将来、9人目のオリンピック選手になるであろう彼の活躍に今後も注目だ。

（有馬 利香・商2）

インタビュー中は終始笑顔で、気負いを感じさせなかったが、「同期には負けたくない」と、負けず嫌いな一面ものぞかせた。また、フェンシングをやめたいと思ったことは？ という質問に対しては、「しょっちゅう思ってます」と笑顔で返す。そこに、気さくな人柄と同時にフェンシングとの強い絆を感じた。

（成清 千紗・文1）

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.